

2024 年度
第 24 回女子美制作・研究奨励賞
達成・進捗報告書

中村 花絵

略歴

1990 北海道網走郡生まれ

2013 女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻版画コース卒業〈加藤成之記念賞, 美術館賞〉

2015 女子美術大学大学院美術研究科修士課程美術専攻版画研究領域修了〈福沢一郎賞, 美術館賞, 美術館収蔵作品賞〉

個展

2015 個展(OGallery／銀座)

2023 May I have a large container of coffee?(福沢一郎記念館／世田谷)

2025 Full of Ambiguity(GALLERY IRO／吉祥寺)

グループ展

2015 回り道(アキバタマビ'21／千代田)

2016 女子美の新星(女子美術大学美術館)

2016 FINE ART/UNIVERSITY SELECTION 2016-2017(茨城県つくば美術館)

2017 cross references: 協働のためのケーススタディ(アートラボはしもと)

2018 現在への起点—女子美収蔵作品を中心に—(女子美術大学美術館)

2018 Who are you? 松浦進 × 中村花絵 Contemporary Print Exhibition(網走市立美術館)

2022 帯広美術館開館30周年記念 道東アートファイル2022+道東新世代(北海道立帯広美術館)

2022 めぐられるページ、横切るハト。(小金井アートスポット シャトー2F／武蔵小金井)

2025 版表現新進作家展 2025(サントミューゼ 上田市立美術館—プロムナード) 他

アーティスト・イン・レジデンス

2019 しべつアーティストインレジデンス事業(北海道／士別市)

受賞

2014 全国大学版画展 町田市立国際版画美術館収蔵賞(町田市立国際版画美術館)('12町田市立国際版画美術館収蔵賞)

2016 第12回南島原市セミナリヨ版画展 読売新聞西部本社賞(ありえコレジョホール／長崎)

2018 日本版画協会版画展 深澤幸雄賞(東京都美術館)('12 A部門奨励賞、'15 山口源新人賞)

2024 第24回女子美制作・研究奨励賞

社会貢献活動

2017-22 沼津市山口源顕彰事業 シルクスクリーンワークショップ(静岡県)

2019 アートラボはしもと ペタペタ 光るこいのぼり作り(神奈川県)

2019 美幌博物館 シルクスクリーンワークショップ(北海道)

2025 网走市立美術館 オホツク・アートセミナー『シルクスクリーンで作ろう』(北海道)

2025 蒼羽芸術高等専修学校 シルクスクリーン創作体験授業(群馬県)

パブリックコレクション

町田市立国際版画美術館、沼津市庄司美術館、女子美術大学美術館、土別市立博物館

2015年頃までは見る(see)行為の不確かさをテーマに主観的な視点で作品を展開してきた。近年では見る行為の連鎖によって生じる社会現象やメディア機能そのものに注目し、より客観的な視点で作品を制作を行っている。

日常の中で「なぜこんなことが」と違和感を覚える事象の多くは、対象の本質が切り捨てられ、理解しやすい要素のみが強制された〈贋造〉が生成されていることに起因すると考えている。操作されたメディアは大衆の感性を刺激し、新たなミスリードを生み出す可能性を常に孕んでいる。私たちは実際には何を見ているのだろうか、という問いが私の制作の出発点にある。

現代社会は、人々が恣意的に作り出した不確かな情報やイメージに満ちている。そうした状況の中で思考の拠り所を見失わぬために、私は制作という行為を通じてその不確かな対象と向き合っている。私にとって制作という行為は、既存の構造やルールを可視化し、自身の思考を整理するための手段であり、この過程を通して自分自身が社会の中でどのような立場に置かれているかを徐々に理解していくことができると考えている。

制作行為の中で、私は画像に編集を加えていく。画像は絵の具と同様に扱われる一つのメディアとなり、元のイメージを保ちながらもそこに私自身の思考や行為を介入させていく。その結果、写されたものの本質や機能性は後景化し、代わりに私自身の行為の痕跡が画面に浮かび上がる。このプロセスは〈贋造〉を新たに生み出す行為と等しいものであるという自覚を伴っている。

編集されたイメージは最終的に支持体へと印刷され、作品として完成する。印刷方法は主にシルクスクリーンやインクジェット等のデジタルプリントを用いて

いる。印刷術を用いた作品は支持体に直接絵の具をのせる行為とは異なり、筆跡やマチエールが残りにくい。感情や時間的な痕跡、さらには作者の存在感すらも画面から抑制され、作品をより客観的な視点で捉えることができる。そのため、常に冷静な視点で作品と向き合うことができる所以である。

また、版を介する工程においては、意図していないかった視覚効果が生じる場合がある。印刷技術とメカニックな要素は不可分であり、そうした偶然性を受け入れながら作品を完成へと導いている。

この一連の制作過程において、私は「見る(look)」という行為を繰り返し実践し、その行為 자체を思考の対象としている。これは社会の在り方を見つめるための行動であると同時に、私自身が私自身を見返す営みでもある。

制作作品



Bits and Pieces

Screenprint on wood panel

180 × 230 mm

2025

12 pieces

[Full of Ambiguity](#)

[版表現新進作家展](#)



Out of Reach

Screenprint on wood panel (a set of 2 works)

210 × 148 mm

2025

3 pieces

[Full of Ambiguity](#)

[版表現新進作家展](#)



Recurring Pattern

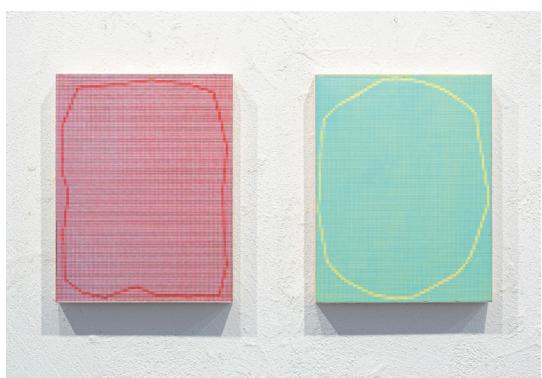
Screenprint on wood panel

272 × 190 mm, 272 × 160 mm

2025

[Full of Ambiguity](#)

[版表現新進作家展](#)



Drawing

screenprint on wood panel

180 × 140 mm

2025

[Full of Ambiguity](#)

[版表現新進作家展](#)

展覧会報告 — ①

個展 | Full of Ambiguity

概要

会期 2025年11月7日～11月16日

会場 GALLERY IRO

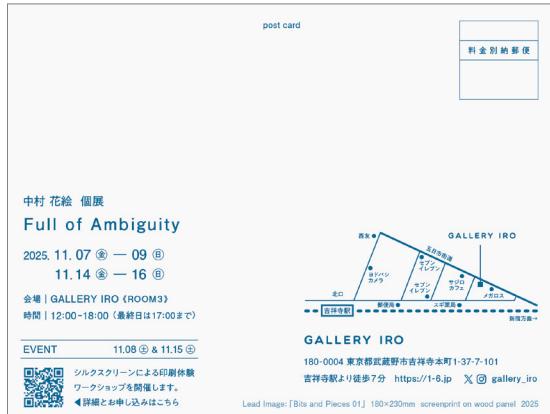
住所 東京都武蔵野市吉祥寺本町1丁目

web <https://1-6.jp/>イベント

シルクスクリーン印刷体験ワークショップ

日程 2025年11月8日 14:00-(4名参加)

2025年11月15日 16:00-(4名参加)

ステートメント

こんなもん言われなくともわかる、と逆に困惑してしまうような注意書きに遭遇することがある。注意書きでなくとも例えばワイドショーなんかでは、そこそこのいいことにも説明を求めてるし、SNS上でもそのムーブを引き継いでいたりする。(かといって、まともな説明が必要なものはしっかり濁されているけれど。)取るに足らないようなことにもわかりやすさを追求する空気感に、わずらわしさを覚えて窒息しそうになる。

そんなことに鬱屈していたとき、ふとピントの合っていない写真に目が留まった。それはあまりに曖昧でわかりにくかったが、全てが溶けて一体となっているような画面の状態は何にも縛られておらず、息詰ったわたしの目からは優美に映った。

あらゆるものを見事にしようとする潮流から離れ、曖昧に満ちたいと思えた。

テーマ

本展では、「わかりやすさ」が強く求められる現代において、あえてわかりにくいイメージを制作することを主題とした。

例えば出品作の《Bits and Pieces》シリーズでは、シルクスクリーンによる制作工程で生じる現象を積極的に取り込み、もともと曖昧な像をさらに不確かなものへと変化させている。

制作にあたっては、印刷物の基本色であるCMYKの各版を、規則的に配列された網点へと変換し、パール顔料を含んだ淡い色彩で繰り返し刷り重ねた。その過程において、パール顔料による反射作用、わずかな版ずれによって生じるモアレ、インクの積層による画面の隆起といった要素が付加される。

これらの不安定かつ制御しきれない要素を重ね合わせることで、像の揺らぎを意図的に強調し、視覚的な曖昧さそのものを作り出す。明確な像や意味へと収束することを拒むこれらのイメージは、受け手に対して解釈の余地を残し、見る行為そのものを問い合わせるものとなっている。



成果

作品を展示するにあたって、作品と受け手(自身を含む)の心理的な距離感は、作品の性質や配置方法に加え、展示空間の規模や壁面の色・素材などの外的要因によっても大きく左右される。本展の企画にあたっては、受け手との適度な距離感が保てる生活空間に近い安心感を有している展示スペースを検討し、以前より注目していた「GALLERY IRO」(オーナー:前田龍一氏)にコンタクトを取ったところ快く応じていただき、本展を開催することができた。

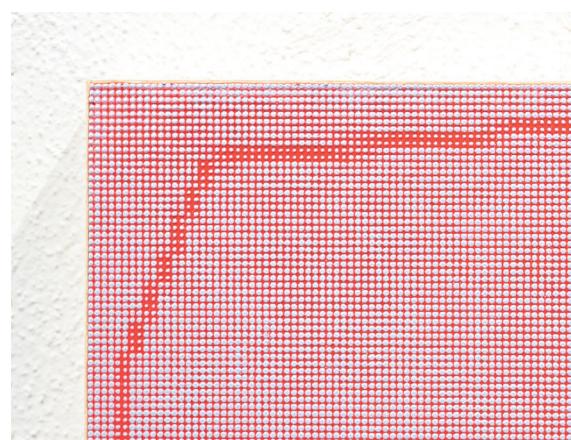
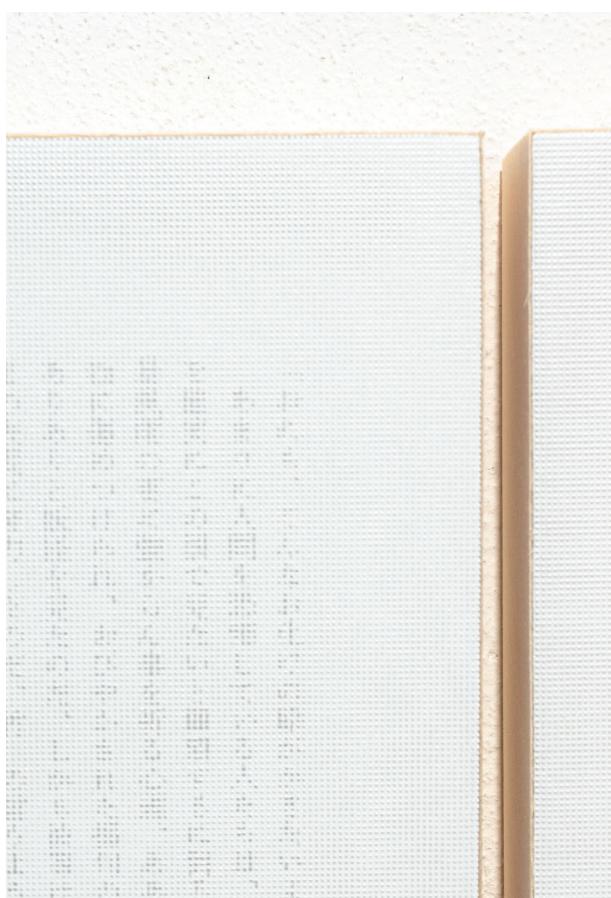
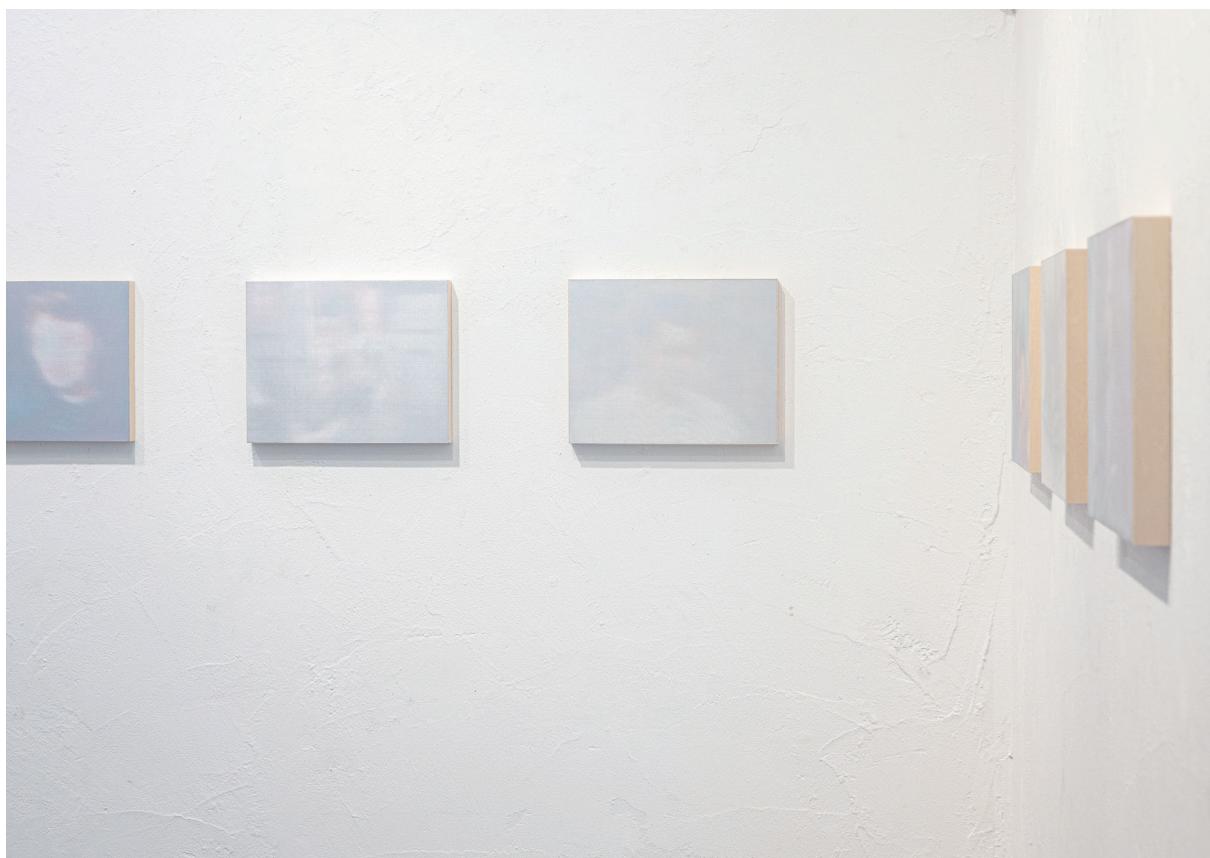
ギャラリーによるSNSでの情報発信のサポートもあり、ギャラリーの既存フォロワーに加え、投稿をきっかけに来場した新規の鑑賞者も多く訪れた。来場者との対話を通して、作品に関わる実践的な知見を得るとともに、現代社会において作品を発表する意義やその在り方について、改めて思考を深める機会となった。これらの経験は、今後の制作において展示空間と作品

の関係性をより精緻に検討するための重要な指針となると考えている。

また、会期中の土曜日には作品の構造的理解を深めることや版画技術の普及を目的とした「シルクスクリーン印刷体験ワークショップ」を実施した。未就学児から同年代の方まで幅広い層が集まり、版画を専攻した本学の卒業生も参加し、世代や経験の異なる参加者が同じ場で技法に触れる機会となった。版画技法は個人で制作環境を整えることが難しく、継続に課題を抱えやすい。本ワークショップは制作環境や創作の継続方法についての意見交流をする場としても機能し、こうした取り組みは、作品制作を再開・継続するための一つの契機として有効であることを示す結果となつた。







展覧会報告 — ②

第50回記念 全国大学版画展 関連企画 版表現新進作家展 2025

概要

会期	2025年11月29日～2026年1月12日
会場	サントミューゼ上田市立美術館 2F プロムナード
住所	長野県上田市天神三丁目15番15号
web	https://www.santomyuze.com/
出品作家	柏木優希／加藤万結／田島恵美／ 中村花絵／日高衣紅



展覧会内容

「版表現新進作家展」は、現役学生の発表の場である「全国大学版画展」に併せ、大学を卒業した作家たちのその後の展開を発表する機会として設けられた2023年より開催されている企画展である。

※上記内容は以下の資料を参考に、筆者が記述した。

参考資料：

小笠原正・岡田智恵「展覧会評|第48回全国大学版画展」
『大学版画学会会誌』第52号, 2024年, 79頁

展示構成

本展は個展から間もなくの機会だったため、直前に開催した個展に出品した作品群の中から厳選し、再構

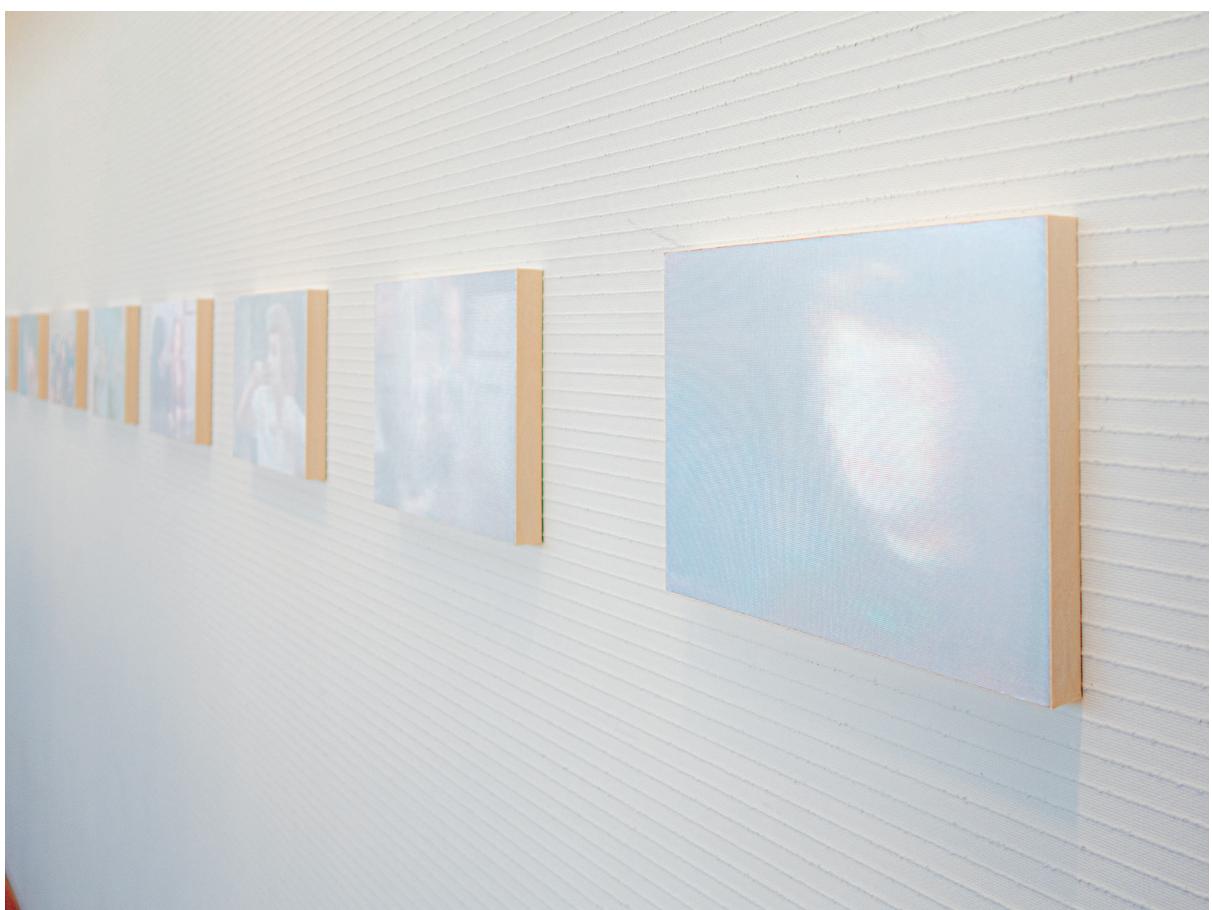
成を行った。展示テーマについても個展と同様の設定としつつ、プロムナードという開放的な空間に合わせて、作品の配置や見え方を調整した。

成果

個展とは異なる条件を持つ美術館空間において作品を展示したこと、空間の性質による作品の見え方や、作品提示の方法の適否を比較・検証することができた。

特に光が作品に与える影響からは多くの学びを得た。今回展示した作品はパール顔料が含むため、光に対して強い反射性を有している。上田市立美術館のプロムナードは中庭に面した大きなガラス壁および上部の窓ガラスから自然光が差し込む構造となっており、その採光の強弱は天候や時間帯によって変化する。これにより、作品表面の反射や色調が変化し、鑑賞のタイミングによって印象が異なることを確認した。この経験から、光環境は作品の視覚的特性を左右する重要な要素であり、特に反射性の高い素材を用いた作品においては、展示空間の採光条件を含めた計画が不可欠であることを再認識した。





社会貢献活動実施報告—①

オホーツク・アートセミナー 『シルクスクリーンで作ろう』

概要

開催日	2025年3月22日・23日
会場	網走市立美術館 第1展示室
住所	北海道網走市南6条西1
主 催	オホーツク・アートセミナー実行委員会
後 援	網走市、網走市教育委員会、 網走市文化連盟
参加人数	9名(10代～70代)

企画の経緯と意図

2018年の網走美術館での展覧会を契機に交流が続いている同館館長・吉道谷朝生 氏より、シルクスクリーンのワークショップ講師の依頼を受け、本企画の開催に至った。

本ワークショップに関しては「オホーツク・アートセミナー」の事業の中で実施されたものであり、同セミナーは、豊かな自然環境に恵まれたオホーツク地域を舞台に、文化交流や表現方法の研修を通して、地域文化の創出と活性化に寄与することを目的としている。

自然と文化の享受の相関を実証する場を、豊かな自然に恵まれたオホーツクに設定し、文化的交流や表現方法の研修を通じて自らが創りだす地域文化の活性に資する。

(オホーツク・アートセミナー企画書より引用)

ワークショップの内容、作業の流れ

本ワークショップではシルクスクリーン技法の特性や魅力を十分に体験してもらうことを目的とし、複数ある製版方法の中でも、最も精度が高い「写真製版法」を採用した。

版は内寸27×39cmのものを参加者1人につき1枚用意し、作品のイメージサイズは版の内寸を基準にして各自に検討してもらった。その結果、1枚の版に複数のイメージを焼き付ける試みや、多色刷りを計画するなど、参加者それぞれの発想を活かした多様な制作が見られた。

原稿の種類は手書き、デジタルイラストレーション、写真など、二次元であれば形式を問わず対応した。

デジタルイラストレーションおよび写真に関しては専用のフォームを通してデータを提出してもらい、シルクスクリーン原稿に適した形式への変換は講師側で行った。



1日目

- 10:00 - シルクスクリーンの概要の説明
 10:15 - おおまかな作業の流れの説明
 10:30 - 下絵の制作・トレース
 11:30 - 製版(感光乳剤の塗布)
 12:00 - 昼休憩
 13:00 - 製版(感光→水洗)
 15:30 1日目終了

2日目

- 10:00 - 製版作業(前日の続き)
 11:00 - 印刷
 12:00 - 昼休憩
 13:00 - 印刷
 15:30 - 片付け
 16:30 - 鑑賞会
 17:00 終了

ワークショップの進行と結果

今回、「写真製版法」を採用したワークショップの実施にあたり、機材の用意や感光時間など各工程における適用条件の確認を事前に行った。

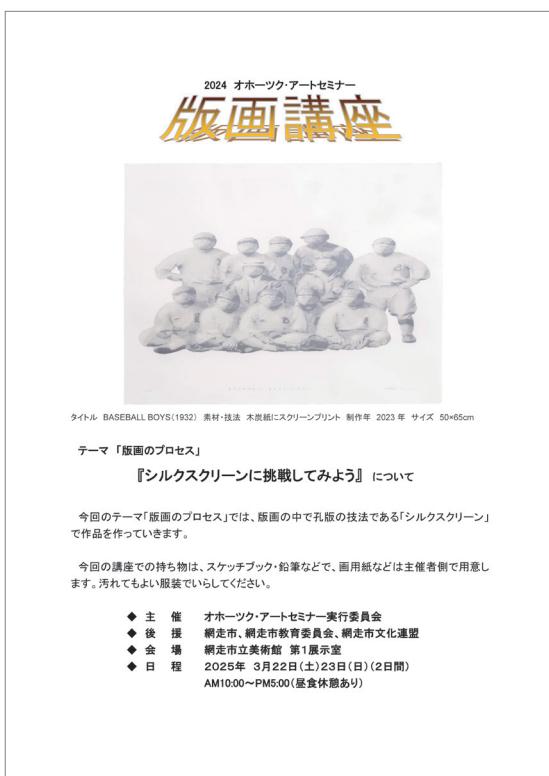
下絵作成の工程では、デジタルイラストレーションおよび写真データをシルクスクリーン原稿に適した形式に変換する作業をモニターに投影して行った。その際、原稿が徐々にシルクスクリーン用に変換されていく過程を多くの参加者が興味深そうに観察しており、制作工程そのものへの関心の高さが伺えた。

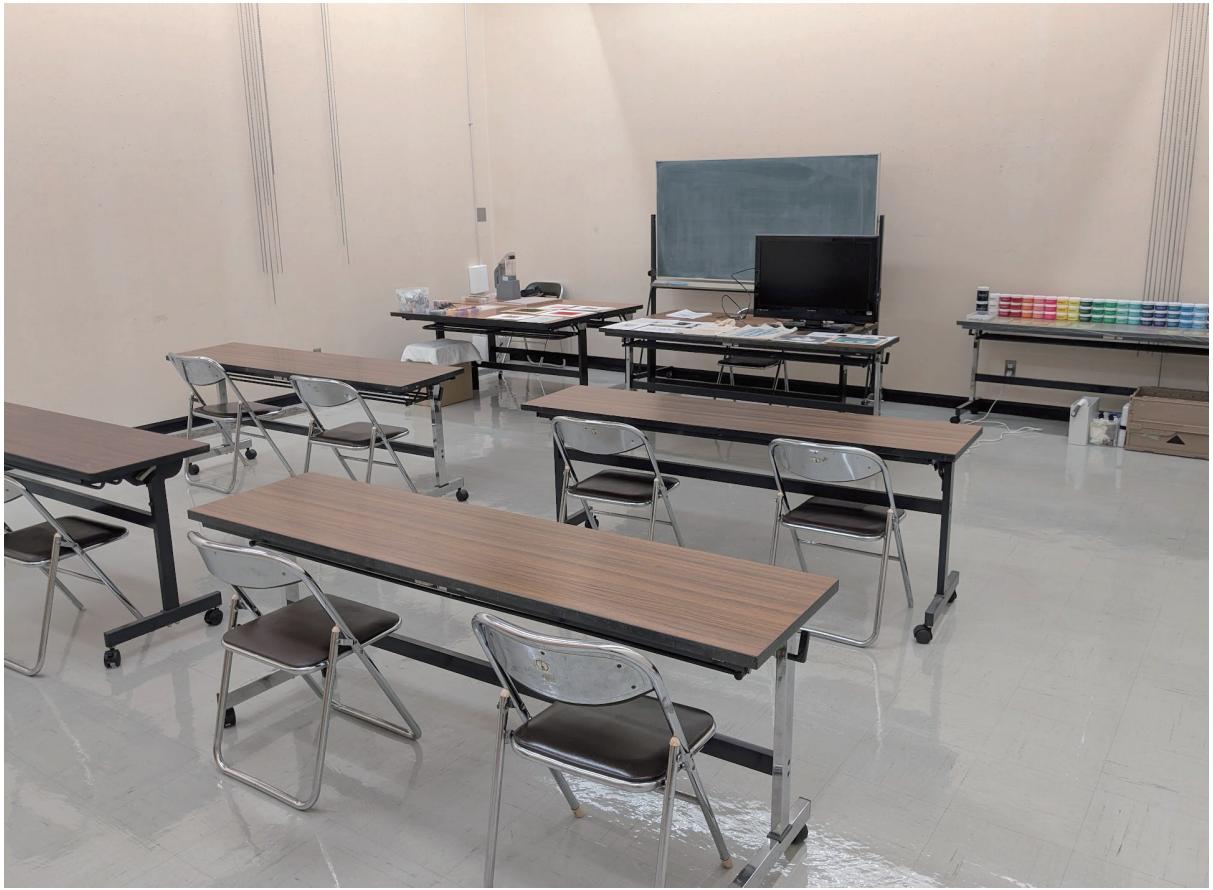
感光乳剤塗布の工程までは順調に進行していたが、乳剤塗布後の乾燥時間が十分でなかったため、製版に不具合が生じる結果となった。この状況を受け、1日目は予定より早めに切り上げ、製版に不具合が生じた版については感光乳剤の再塗布を講師側で行った。その結果、参加者は翌日の開始時間から感光工程より作業を再開することができた。

トラブルが発生したにも関わらず、参加者および美術館スタッフが動搖せずに応じてくれたため、適切な判断と対応を行うことができ全体としても混乱なく進行することができたと評価している。

その後の印刷工程では、各自が制作したイメージが紙や布などに刷り上げられることに対する前向きな反応が多く見られ、非常に良い雰囲気の中でワークショップを終えることができた。

今後への課題および改善すべき点も明らかとなつたが、準備段階から当日に至るまで、運営面・技術面の双方において多くの知見を得られた機会となった。





社会貢献活動実施報告 —②

シルクスクリーン創作体験授業

概要

開催日 2025年11月27日

会場 蒼羽藝術高等専修学校

住所 群馬県前橋市表町1-28-13

参加人数 10名

企画の経緯と意図

本学の奨励制度である福沢一郎賞を2015年の大学院修了時に受賞したことを契機に、2023年に福沢一郎記念館にて個展を開催する機会を得た。その際に、福沢一郎記念館学芸員であり本学非常勤講師でもある伊藤佳之 氏より本授業について相談を受け、開催に至った。

本授業は蒼羽藝術高等専修学校の芸術科美術専攻に在籍する生徒を対象にシルクスクリーン技法を通じて版画表現への理解を深めることを目的として実施した。

ワークショップの内容、作業の流れ

本授業では前項のオホーツク・アートセミナー『シルクスクリーンで作ろう』での経験を活かし、製版方法には「写真製版法」を採用した。

オホーツク・アートセミナーと同様に、内寸27×39cmの版を生徒1人につき1枚用意し、作品のイメージサイズは版の内寸を基準にして各自に検討してもらった。結果もまた、1枚の版に複数のイメージを焼き付ける試みや、多色刷りを計画するなど、生徒それぞれの発想を活かした多様な制作が見られた。

半日で実施するため、事前に下絵を用意してもらい、当日はトレースから開始できるよう工程を組んだ。

下絵は基本的に手書きのものに限定し、描線や形態の特徴がシルクスクリーンの表現としてどのように現れるかを各自が意識的に分析できるよう配慮した。

10:30 - シルクスクリーンの概要の説明

10:45 - 下絵のトレース

11:15 - 製版(感光→水洗)

12:20 - 昼休憩

13:10 - 印刷

15:30 - 片付け

15:45 - 鑑賞会

16:00 終了

授業の進行と結果

オホーツク・アートセミナーでの実施経験を踏まえた準備ができていたため、当日は比較的スムーズに授業を進行することができた。

前回の反省を活かし、本授業では事前に感光乳剤を塗布・乾燥させた版を用意した。結果として、大きなトラブルもなく予定していた工程を滞りなく実施することができた。

同校ではこれまでにも版画体験授業を複数回実施しており、シルクスクリーン技法は今回が初めてであった。そのため、授業中には他の版種との違いや特徴を比較・分析する発言が生徒から聞かれ、版画表現への理解がより主体的に深められている様子がうかがえた。

本年は、女子美制作・研究奨励賞を受賞したこと
を一つの契機として、これまでの制作活動を振り返り、
その過程や成果を丁寧に再考することで、今後の制
作に向けた視点を整理し、作品へと反映させることができた1年だった。様々な活動に取り組んだ中でも、ど
りわけ個展に関する経験は、これから創作活動の方
向性に大きな影響を与えるものになったと考えている。

個展の準備期間中には、自身で決定した「わかり
にくさ／曖昧さ」という凡庸なテーマに対して、どう
に向き合い、作品として成立させるかについて、展覧
会直前まで試行錯誤を重ねた。その結果、パール顔
料をはじめとする素材の選択や支持体としてパネル
を用いたことなど、これまでのシルクスクリーン制作で
はほとんど取り入れてこなかった材料や方法を効果
的に作品へと取り込むことができた。版画の制作で
は、ある程度定められた工程や手続きを踏む必要が
あるため、その枠組みの中で自己表現の着地点を見
出すことが常に課題となる。そうした条件のもとで、自
身にとっての新たな材料や方法を発見できたことは、
今後の制作に向けた大きな収穫であった。

個展では想像以上に多くの来場者に足を運んで
いただいたが、その中でも特に印象に残っている来場
者がいる。その女性は重たそうなリュックを背負って一
人で会場に来てくださり、長い時間をかけて丁寧に作
品を鑑賞してくれた。来場のお礼をきっかけに言葉を
交わしたところ、SNSでの告知を見て、この展覧会を
目的に名古屋から足を運んでくださったとのことで
あった。作品と併せてステートメントの言葉にも反応を
示してくださり、作品を制作し発表することの責任と意
義を、あらためて実感する機会となった。

本賞に私を選出してくださった審査員の皆様、ならびに
展覧会をはじめとする創作活動に関わってくださった
すべての皆様に、心より御礼申し上げます。

2026年1月12日

以上をもって、女子美制作・研究奨励賞の受賞後に
おける活動報告を結びとする。

→ ← → ← ← —